


Pathshala
पाठशाला
A Gateway to All Post Graduate Courses

MHRD
Govt. of India
An MHRD Project under its National Mission on Education through ICT (NME-ICT)

Production of Courseware
-Content for
Japanese Subject

Paper No. : 06 古・中・近世日本文学 (Ancient, Medieval and Pre-Modern Literature)
Module : 08 風土記の各地域の伝説 2 (Provincial Legends of Fudoki 2)



Development Team

Principal Investigator :
and
Paper Coordinator :

Prof. Anita Khanna
Jawaharlal Nehru University, New Delhi

Content Writer :

Prof. Anita Khanna
Jawaharlal Nehru University, New Delhi

Content Reviewer :

Prof. Suzuki Sadami
Japan

Japanese

古・中・近世日本文学 (Ancient, Medieval and Pre-Modern Literature)

風土記の各地域の伝説 2 (Provincial Legends of Fudoki 2)

| Description of Module | |
|-----------------------|--|
| Subject Name | Japanese |
| Paper Name | 古・中・近世日本文学 (Ancient, Medieval and Pre-Modern Literature) |
| Module Title | 風土記の各地域の伝説 2 (Provincial Legends of Fudoki 2) |
| Module ID | JPN-P06-M08 |
| Quadrant 1 | E-Text |

 **Pathshala**
पाठशाला
A Gateway to All Post Graduate Courses

Japanese

古・中・近世日本文学 (Ancient, Medieval and Pre-Modern Literature)

風土記の各地域の伝説 2 (Provincial Legends of Fudoki 2)

風土記の各地域の伝説 2

目的

- 前モジュールで学習したことについて更に理解を深めること
- 特に、風土記の文学性に関して考察すること

キーワード

ひたちふどき いずもふどき りっこくし こおり しょくにほんぎ
 常陸風土記、出雲風土記、『六国史』、郡、「続日本紀」、「浦嶋子」、「近江の
 国」の背景

712 年に古事記は、編集者の太安万侶によって元明天皇へ献上された。そして、
 翌年の713 年に元明天皇は、日本全国に向けて勅語を下された。この勅命に対応して
 大和各国で編纂された文献は、それぞれの国・地域の名前と「風土記」という言葉をあ
 わせた形式で伝えられている。例えば、常陸風土記、出雲風土記などが代表的である。

この時、元明天皇が出した詔については、奈良時代の代表的な国史書である『六国
 史』の2番目の「続日本紀」にも記されている。前モジュールで述べたように、風土記
 の特徴は、地名を二字で記すように統一されたこと、各国の特産物や、鉱物、植物、
 動物及び海産物の名前、その土地の肥沃などについてまとめられていること、それぞれ
 の地域にある山・川の名前の起源や伝承、言い伝えなどを記録してあることが挙げら
 れる。このようにして編纂された風土記は、中央政府に献上される。

これらの情報は各風土記に、同じ順序で項目別にざっと記録してある。ただし、
 山・川などの名前の由来と、その地方の伝承や伝説を古老から聞いた伝聞として、
 漢文で記述されているものが多いが、この理由は、地方の方言や伝統の影響があると
 指摘されている。また、それぞれの地域にある物の名前の由来や、それと関連がある
 各地方の言い伝えが記録されているので、それぞれの地方の風俗習慣、伝説などに
 ついて、理解を深めることができる。更に、風土記における各地域の神話、伝説などに
 ついての記述には、文学書としての面もあり、日本文学の種の存在が確認できる。これら
 の部分は、変体漢文の一種である、「宣命書き」のスタイルで執筆されている。

前モジュールにも述べたと思うが、風土記の分類項目の五番は、『古老の代々伝え
 ってきた旧聞異事』となっている。風土記は、諸国から提出された報告書だから、
 地理志の形式を意識して書かれた文献である。また、風土記は、日本国の各地に伝わる
 伝説が、初めて正式に記述された文書であるとも言える。このモジュールでは、その
 文学性を、文学史上よく知られている伝説を中心に勉強しよう。

1. 丹後風土記の浦島太郎の伝説

風土記にある伝説の中で一番知られているものは、浦島太郎の伝説である。これは丹
 後風土記にある。

しゅじんこう うらしまこ ひとり こぶね の うみ ま なか で つ みっかみばん
 主人公の浦嶋子は、一人で小舟に乗って、海の真ん中に出て釣りをしたが、三日三晩
 た いちひき さかな か ごしょく かめ つ あ かめ
 経っても一匹の魚も釣れず、代わりに五色の亀を釣り上げた。するとその亀は、たち
 うつく ふじん すがた うらしまこ じょせい かいちゆう ほうらいざん
 まちに美しい婦人の姿となった。浦嶋子とその女性は、海中の蓬莱山(『とこよの
 よ い かくち めぐ せんじん あ じょせい かめひめ
 くに』とも読める)に行き、各地を巡って仙人たちに会う。女性は「亀比売」という
 せんにかい ひめ どうほう うみ なか れいざん
 仙人界の姫であった。蓬莱山とは、中国の伝説に出てくる、東方の海の中にある霊山で
 せんじん す せかい ふろうふし ち ち うらしまこ
 ある。そこは仙人が住む世界で、不老不死の地とされている。その地で浦嶋子と
 かめひめ
 亀比売の二人は、夫婦として三年の時を過ごした。そんなある日のことである。

うらしまこ にんげんかい もと
 ● 浦嶋子は人間界に戻る

うらしまこ ちじょう のこ かぞく こと しんぱい こきょう かえ
 浦嶋子は、地上に残してきた家族の事が心配になり、故郷に帰りたくなる。そして、
 つま かめひめ わか つ かめひめ たまてばこ
 妻の亀比売に別れを告げることを決める。そうすると、亀比売は、浦嶋子に玉手箱をわた
 し、次のように言う。「あなたが、蓬莱山にもう一度戻りたいならば、決してこの箱を開
 けてはいけない」。浦嶋子は玉手箱を抱えて故郷にもどった。浦嶋子が故郷に着くと、彼
 の家族はすでになくなっており、故郷の様子も全く変わったものとなっていた。その
 じょうきょう うらしまこ あわ きも つま かめひめ わた
 状況をみた浦嶋子は、とても、慌ただしい気持ちになって、妻の亀比売から渡された
 たまてばこ あ しわ
 玉手箱を開けてしまう。そうすると、たちまちに皺だらけのおじいさんになってしまう。

かめひめ ほうらいざん く ねんかん あいだ にんげん せかい ねんいじょう
 実は、亀比売と蓬莱山で暮らした 3 年間の間に、人間の世界では 300 年以上も
 けいか
 経過していたのだった。

このように丹後国風土記の伝説は「浦島太郎とおとひめ」のストーリーとして日本の各地に伝えられている。但し、現代の日本で語り継がれている伝説では、二人の住んでいた場所は蓬莱山ではなく、「龍宮城」である。更に、浦島太郎の相手の婦人は、龍神の娘であり、亀の姫ではない。

次に、風土記にあるもう一つの伝説を紹介する。

2. 近江の国の羽衣の伝説

これは近江の国の羽衣の伝説であり、白鳥として天女が飛び降りたとされる場所は、今の琵琶湖である。風土記によると、古代近江国の諸王の中に、自分の先祖を神話と結びつきたい王がいて、「私の祖先は天女である」と宣言し、自分の権威を強調しようとした。当時、天女は「穀物の霊神」として知られ、白鳥は、天女が姿を変えたものであるとされた。そのため、白鳥は縁起の良い生き物とされ、白鳥のいる国は、穀物が豊富な国であり、土地の肥沃性が高いと考えられていた。同じテーマは、風土記の逸文の丹波国の「丹波の郡」にある。

3. 「因幡の白兔」の伝説

更に、風土記には、古事記や日本書紀の伝説と同じ内容のものもある。例えば、古事記にある「オオクニヌシノミコトと因幡の白兔」の伝説が挙げられる。

いなば しろ うみ わた ため だま いちれつ なら せなか うえ ある
 稲葉の白ウサギは海を渡る為に、ワニを騙して一列に並べて、その背中の上を歩いて

わた まえ いちぞく じんこう かぞ つ
 渡ろうと考えた。そこで、「お前の一族の人口を数えてやろう」とワニに告げ、そこに

す ぜんいんよ あつ む きし いちれつ なら
 住んでいるワニを全員呼び集めさせた。そして、ワニを向こう岸まで一列に並べ、その

うえ ある わた い のこ
 上を歩いて渡って行った。しかし、ウサギが残り一歩で岸までたどり着くと言うところ

みやぶ
 で、最後のワニに足を運んだ時、ワニはウサギの本当の目的を見破った。ウサギに騙

おこ は と
 されたことに怒ったワニは、ウサギを捕まえて、ウサギの毛皮を剥ぎ取ったのであった。

でんせつ で いずものくにふどき くにつく しんわ
 この伝説に出てくるオオクニヌシノミコトは、出雲国風土記にある「国造りの神話」

ちゅうしんてき やくわり は か き ぶん
 において、中心的な役割を果たしたことが下記の文からもわかる。

いずもこく とうち
 出雲国を統治することとなったオオクニヌシが、

「私一人でどうやって、国造りをすればいいのだろうか。誰か、私と共に国造りをしてくれる神はいないだろうか。」

かなた うみ て
 と落ち込んでいると、彼方から海を照らしてやってくる神がいた。その神は、オオクニヌシにこう告げた。

ていねい まつ
 「私のことを丁寧に祀ってくれるならば、あなたの国造りに協力しよう。しかし、私を祀らなければ、あなたの国造りは、きつとうまくいかないだろう。」

オオクニヌシはその神に対して、

「あなたを祀るにはどうすれば良いのでしょうか？」

と尋ねた。すると、その神は

「私の魂^{たましい}を大和の青垣^{あおがき}の東の山に祀れ」

と答えました。そうしてこの神は「三輪山^{みわやま}」に祀られることとなったのである。

最後に

風土記の各地方の伝説は、それぞれの国の古翁^{こおきな}の言い伝え^{もと}を基に、各地域の地名や山・川・原・野の名前の由来を説明している。これらの伝説は、面白くて文学性に富んでいるため、これらの長・短編の説話が物語のように展開し、文学的な面が多く含まれていると言える。

参考文献

1. 植垣節也校注訳、『新編日本古典文学全集 5・風土記』、小学館、1997年。